

道化の季節

増田みず子

「わ
え？」
のはその残り。でも明日にな
ればもうだめだから」



「わかる？ 私
れいだっ
たの。昼
間がね。今
日は今日
が一番き

道化の季節

増田みず子



道化の季節

一九八一年二月一〇日 第一刷発行
一九八一年二月二八日 第二刷発行

定 価 九八〇円

著 者 増田みず子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部二三〇一六三六一
販売部二三八一二七八一

印刷所 中央精版印刷株式会社
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替をいたします。

© 1981 M. MASUDA

Printed in Japan 0093-772298-3041

目次

道化の季節	5
秋の避暑客	67
地下鉄	129
戻り橋	159

装丁
沢田重隆

道化の季節

道化の季節

「すばる」昭和五四年一月号

満員に近い館内は、微のにおいがした。映画はフランスブルジョア人種の恋愛物だった。名画座と称する古ぼけた映画館のスクリーンの上で平たく動きまわる美男美女の顔を、時々、煤に似た黒い雨が走る。

主役の二人ともに、頗る知性派で金満家であり、二人を取り巻く人々は女主人公の夫を含めて概ね好意的に思われるのだが、二人はある日突然に駆け落ちして、陽気に騒ぎながらパリから田舎へ逃避行ドライブを続ける。風景は大層美しかった。俳優は主役から脇役に到るまで、見憶えのある顔で、以前に何度も死んだり結婚したり駆け落ちしたりしている。

見ているうちに何だか、美人で裕福でなければ恋愛する資格もないと暗示されている気分になってくる。まるで入場料三百円の名画座へ通う人種は他人の恋愛を見物するしか能がないと言われている感じだ。もともと駆け落ち用の車も旅費も持ち合わせがないから、わずかな見物料を払って他人の駆け落ちを眺めさせて戴いているのも事実である。

なお子は馬鹿らしくなって途中で席を立った。するとすぐ背後でも続いて誰かが立ちあがる気配があった。

階段をあがりきって地表に立つと、思ったとおり、あとから若い男が一人、きよろきよろ人を捜すようにして、館内から現われた。まだ高校生みたいな男の子だが、ボロシャツの胸に煙草の箱の四角い膨らみがあるから大学生かもしれない。下はストレートのジーンズにスニーカーである。彼は、待ち受けていたようななお子のまっすぐな視線に会うと気弱そうに顔をそむけ、いかにもうろたえて、先刻の俳優二人が抱きあっている大写しのポスターに見入るふりをした。なお子は苦笑してさっさと駅の方へ歩きだした。三百円の名画座からおずおず追っかけてくる男では結局しようがないんだなァと思う。映画の中の無制限に裕福な美男美女にしたところで、余分なエネルギーを駆け落ちぐらいにしか消費することを思いつかないわけだが、一週間か二週間に一回、ここへ来るたびに誰か必ず声をかけてくる。アバンチュールをするよりは映画の方が安い。尤も三百円の名画座へ一人で来るような女となら、安上りにアバンチュール出来るかもしれないと男は思うのだろう。中学生以下か中老年夫婦以外の客は、そんなふうに考えている若い男たちに見える。若い女は大概若い男と連れ立っている。自分らの貧しげな恋愛の上に、あんな豪華な恋愛の影を重ねて一体どうしようというのだろう。

名画座から駅まで約五十メートルの距離である。一駅乗って三百メートルも歩けばすぐアパートに着く。便利すぎて物足りないこともある。映画館からついてきた男の子が意を決してなお子に声をかけるための持ち時間は、商店街を通りぬけるまで、たった五分しかない。いくらなお子

がゆっくり歩いても駄まで五分以上はかからない。こちらから振り向いてにこっと笑ってやれば、あの手の臆病そうな男の子はびくっとした様子でいったん足を止めかけて、そのあと急にいかにも用ありげに足を早め、通り過ぎてしまう。慌てて、強制された感じでお茶でもと口走ることもあるが、そんな時でも一目でこちらが年長とわかり、しかもたいして初々しくないせいとか、決してむこうは伝票に手を触れようとしないうし、こちらが出ようと言うまで腰をあげず、ろくに喋りもしない。仕方がないからなお子が先に立ち、伝票をとり、威勢よく、はい、と手渡してやることになる。ひどいになると、その段になってコーヒー代も持っていないのがわかったりする。

そういうのに限っていつまでも優柔不断にもじもじとついてくる。さよならと言うと慌ててさよならと返していきなり反対方向へ逃げてゆくのである。尤も何回か誘われてみて少しは話を繰り返すうちにわかったのだが、女が一人で名画座に入ると、よほど物欲しげか、失恋直後か、大体そういった類に見られるらしい。よっぽど映画マニアなんですね、と言われることもたまにはあるが、いずれにしろ彼らは、恋人のなさそうな女を探すために街角に立つ少年たちであるらしい。なお子自身としては相手に実力を知らしめるために、あるいは練習台として誘われてやっているつもりである。それに適した女なのだろう。美人でない割に若い男の子からよく声をかけられる。声をかけなさい、となお子に命令されて仕方なく従うように彼らはおっかなびっくり声をかけてくる。そして彼らは終始受け身の態勢でいる。尤も場末の三百円の名画座でパトロンにでもなってくれそうな紳士に声をかけて貰おうと思うのは、思う方がまちがっている。

スニーカーの少年はなお子がうしろを振り向いてやる面倒を省いたせいでついに声をかけそび

れたのか、なお子が切符を買って改札口を通ると、その少しうしろから定期券でしおしおと入ってくる。それきりなお子は彼を忘れて自分の現状について考え始めた。

少年をからかうような余分なエネルギーを別のことに使いたいと思っているのだ。しかしなお子の経済力で払えるのは古い映画を観る料金とかコーヒー代程度である。何か習ったりすればたちまち破産だ。スポーツにしてもやるより観る方が安い。旅行も同じ。

大学をやめたのはずいぶん高くついたナと思う。ちゃんと卒業していれば、もう少しはエネルギーの要る複雑な仕事を得られただろう。大学中退というのは中卒や高卒よりもたちが悪い。タオルをたたんだり箱に詰めたり、それをまことしやかに売ったりするだけの仕事ではエネルギーは使いきれない。残ったエネルギーを健康的に費すにはどうにも金が要って、その金を今の給料では都合がつけられない。

何とかこの悪循環を越えないと、私はまさしく淫乱な女になるしかないだろう。なお子は半ば真面目に半ば茶化して自分の不安に眼を向ける。しかし皮肉なことに今感じている不安は、大学をやめる直前の心理状態と酷似していた。どうも根が貧乏性に出来ているらしく、充実感がないと生きているかいないような気分になる。尤も充実感が今まであったためしもないのに現に無事でエネルギーを持て余して生きているのではあるのだが、大学生の時には大学をやめることで当座はしのげた。しかし少しは考え方が進歩したのか、やめることばかり覚えたのでは多分何をやってもすぐやめてしまうだろうと自分の挫折癖を歯止めする技も覚えた。だが進歩はそれで止まっている。目一杯こき使おうという上司もいないので適当にさぼりながら仕事をし、その結果

余剰エネルギーが蓄積されて今にも破裂しそうな気がするのに、思いつくのは相変わらず映画を観たり男の子を誘ってみたり、その時々時間を潰す幼児的方法ばかりである。

乗るのは一駅だけだから、陽子のことを思い出したのはもう電車を降りて改札口を出かった頃である。ひまな時間を潰すには恋愛が一番良いと言っていたのが大学時代の級友で変わり者の陽子であった。(変わり者と言っても、その陽子から、あんたって変わってるね、と言われ続けたのがなお子自身なのだから何とも言えないが)。陽子は、ちっほけな大学で殆ど孤立無援に全共闘だか何とか派だか小グループの中で活動している最中に、将来卒論の担当教官となるべき教授に面と向かって、バカヤローハゲチャビンヒッコンドロ！ と叫んでそれが結局卒論を途中でやめて中退する間接的な原因になった。誠実で陰險な教授が、彼女の日和ったことをあてこすり続けたのである。人生五十年をどうやらくぐってきた教授の方が、彼女より根気がよかった。何がきっかけだったか忘れたが、ゼミの最中に彼女はウルセエナハゲチャビン、テメエの世話にはならないよと啖呵を切って退室してしまったのである。あの前から彼女はリーダー格の男と同棲していて、どういうわけかなお子は一度彼らの間にはさまって寝たことがある。二人がけんかでもしていた時に行き当ったのだらう。あの時も学校の帰りに、遊びに来いと誘うからのこのこついて行って、彼女が一人暮しでないことを初めて知ったのである。

思い出したら急に会いたくなつた。子供も生まれたという話だが、どんな親になっていることか。なお子の方は陽子のやめた何箇所かあとにふらりと休学届を出しにいつて、それきり他の級友にも会っていないから彼女もまだ知らないに違いない。知らせたら、おめでとうと言ってビール

でもおごってくれるような気もするが、反対に、馬鹿だねあんた、変わってるよ、とあっさり決めつけられそうな予感もある。反応を見て、彼女の本来の心情を判定してみたかった。学生時代から、よく、家主に追い出されたと言っては居を転々としていたから今も元の所にいるかどうかは不明だが、近いうち訪ねてみようとなお子は思った。なお子が彼女を好きなのは、構内でヘルメットを小脇に抱えた彼女に会っても、決して運動や主義の話をはじめたことがなく、人なつくく笑って通り過ぎてしまうからである。本の話をするにしても資本論とかトロツキー云々ではなく、オーソドックスすぎるほどの、漱石だの、鷗外だの、外国のならドストエフスキーとかヘッセで、急に「あたしに書ければ書いて書いて書きまくるんだけどなァ」と嘆息したりする。書きなさいよ、と存外こちらにもまじめに反応したりすると笑って、

「馬鹿ね、書けりゃとつくに書いてるよ。書ける人がめったにいないから書けた人が歴史に残るんじゃないのさ」

と言ってまた別の話を始めたりする。

「消去方式にさ、こりゃ出来ない、これも無理、とやれないことを削って行って、現在のこのあたしがいるわけよ。そのうちヘルメットかぶってデモるのも億劫になって日和ってさ、結局子供生んで育てて、勉強しなさい、父さんや母さんみたいにうだつのあがらない人間になりたくないから、なアんでとなりつけてんじゃないの？　今から自分のそんな姿が眼に見えるよ」

「ちょっと聞くけど、どうして彼氏と一緒にになったの？　陽子みたいのは一人の方が自由でいいんじゃない？」

「ところがそうじゃない。本質的に男と女はワンノブアなんだから、一緒になったら何か出来ないってのは原理的におかしいわけよ。あいつは私より頭が緻密だからね、私より臆病で小心だけど。二人一緒の方がやりいいことしかあたしはやりたくない。まあ言ってみれば子供生むものそのひとつよ。あんたにはわからないだろうね」

陽子は最後の言葉に力を入れて、じっとなお子の顔を見た。

「うん……」

わからないこともないが、わからないと答えた方が正直だった。陽子はおかしそうに笑って「二十代後半に子供を生むってヒューマンなんだよ。いい？ 自分の限界を知るくせにまだ何かやりたがるのが三十代。絶望とうぬぼれの中途半端な時期を人間ってうまい具合に子供を育てることで紛らわしちまうのさ。一人でいるとどうなると思う？」

「さみしいね」

「さみしいよ。でもはげちゃびんの癡り固まった先公をやつつけるよりかは、柔らかい赤ン坊にこきつかわれる方がましだからね」

陽子はそのことを言いながら自分が運動から脱落する将来を見極めていたのか、例の人なつこい笑顔を見せてそれなり黙ってしまった。

ある意味では頑固に中途半端を守っている現在のなお子を、陽子がどう決めつけるか楽しみでさえある。彼女はなお子より二つ上の同級生だったから二十六になっている筈だった。会わなくなって三年になる。

思い出しついでに会うことを決めて何やらほっとしたなお子がアパートの路地へ入ろうとした時、視野の端に気になる影がちらついた。何気なく振り向くとボロシャツの少年である。なお子は呆れて首を横に振り振り、すくんだように棒立ちになっている少年に近づいていった。足はじつと地面を踏んでいるが、腰は逃げていて、顔は不自然に斜めうしろにそむけている。

「人違いかもしれないけど、あなたが私の知り合いのような気がするんだけど、どこで会ったかしら？」

なお子は陽子の人なつこい笑顔を真似て、少年の前に立った。向こうから見ると立ちはだかったと表現した方がいよいや、両手を腰に置いた向かい方である。少年は答えなかった。なお子はかっとした。

「答えられないぐらいなら何でついでくるのよ？ わざわざ電車に乗って来たんでしょ？」
いくら怯えたような少年でも、アパートへ入るところを見られたら、あとで面倒なことが起る。早く気がついて良かった。

「僕、道を歩いてただけです」

彼はふてくされたように、少しは姿勢も立て直した感じでぼそっと反論した。

「おやそう。それは偶然ね。私も道を歩いてただけなのよ。ところであの映画は途中で立つほどつまらなかった？」

「知らないよ、そんなこと。僕の家、こっちの方なんだけど、いけませんか？」

「悪かないわよ。定期券見せてなんて言わないから。どうぞお先に」